家づくりが育む建築への道のり ｜ 家づくりは出会いと縁を結ぶ

一級建築士事務所アトリエ4A代表　天野 彰

（第２回／全 12 回）

「家づくりは建築士の職能を教えさらなるチャンスを生む」

自分が住む家を建てることを想像してみよう。それはリフォームでもいい。思い切って今の家を壊して思い通りのわが家をつくってみる。しかし実際には誰もが簡単にはできない。そこで頭の中で本気で想像をしてみる。それは単なる空想ではなく具体的に家族と敷地を想定して真剣にイメージをする。

すぐにカタチは生まれてこない

すでに家を建て住んでいる建築士も多いと思う。その生の家づくりの体験をすることが建て主としての重責と緊張感に包まれる瞬間だ。

建築士としていろいろな構想やカタチが浮かぶと同時に、家族の一人一人の顔や意見も浮かんで本音の思いも伝わってくる。次第に近隣や周りの景色も見えてきて、経済も重く圧し掛かってくる。この瞬間こそが本当の家づくりの実際であり、カタチどころかプランさえ簡単に浮かんでこない。

しかし設計者として建て主を前にしてプランやそのカタチを提案しないでいることは案外難しい。現代は幸か不幸かそのプランやカタチの情報に溢れ、プランニングソフトも進化し、敷地と建て主の情報を入力するだけでコンピューターが瞬時に一軒の家をはじき出してくる時代だ。しかしこれが本当にこの先何十年も家族が住む家なのだろうか?と考えるとその未来も姿も見えてこない。なによりも建築士としての体験にもならない。

が、しかし現実は多くの建て主がそうした拙速な家づくりを是とし、まるで“一個いくら”感覚で家を買ったり建ててしまったりする。これが今日の住宅産業の現実であり日本経済を支えて来たゆえんでもある。

職能とはスペックづくりだけでなく見えない事象eventの探求

改めて建て主と対面し仔細を観察した上で周辺の状況や環境をイメージする。するとプランなどそう簡単には浮かんで来ない。家族と対話するほどにホンネも伝わり家庭経済や周辺の環境も気になりカタチも簡単には出てこない。

このことはあらゆる建築の設計も同じで、スペックなどと単純に要望に従ってエスキースやプランニングなどのデザインや法的、構造的チェックをするだけではなく、見えない環境にどう存在するか?誰がどう動き、いかなる事象が起こり得るか?またそれらにいかに対応し持続するかを想像し思考することこそが建築のすべてに携わる建築士の職能であり、また醍醐味でもある。

家づくりの縁が次の縁を結ぶ

改めて私が体験したあの古都での重圧に震えたことを思い出してみる。しかし家族と親しくなるにつれ、家族の一人一人がその地で動きだし、難しい辺りの情景にもすっと融け込んで行くような不思議な感覚を持った。その途端拘りのないプランがスッと顕れ、雄大なカタチも自然に湧き出して来た。

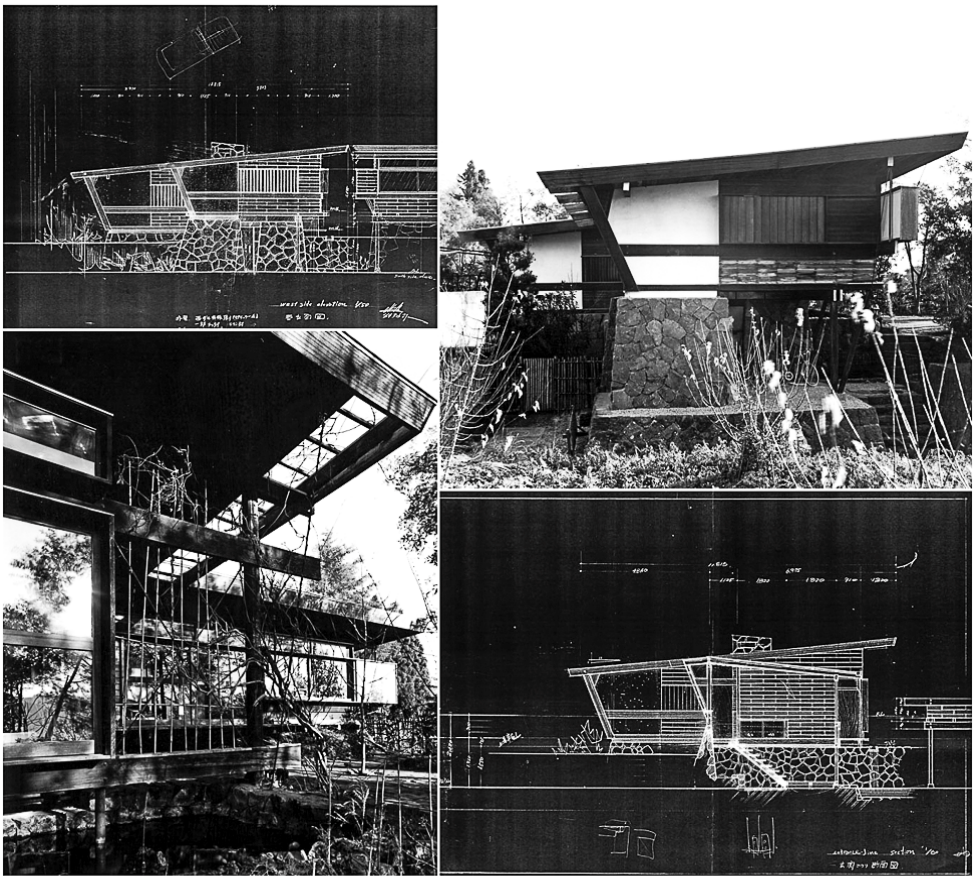
あとは地場産の杉と伝統的な“はいいし”の石積みと家業の醸造蔵の古樽の杉板がすべての空間づくりに加担してくれた。（図・写真 “酒樽の家”故岸崎隆生氏共同設計）しかし、現実はそれほど簡単なことではなく、後日お話をする大きな試練を体験させられることともなる…。

一軒の家の設計をすることは多くの人との出会いがあり体験や試練も与えられる。ときに人生を大きく変えることも起こる。家づくりは単に線を引いて数値を入力するだけではなく、住む人と共に悩み考える。計画系や構造系さらには材料や施工のあらゆる分野の建築士たちもその本質を知り経済はもとより環境や文化を意識することにもなる。それが建築士を醸成し、建築の醸成ともなる。

私はこの家づくりの縁で、西欧の伝統と近代建築とのもやもやした疑念を解こうと日本から飛び出す勇気を得た。戦後間もない東京オリンピック直前の春、津軽海峡を西に横切るソ連貨客船の甲板に居た…。

臼杵“酒樽の家”南北断面図と西の立面図、南庭からの情景写真（岸崎隆生氏との共同設計）

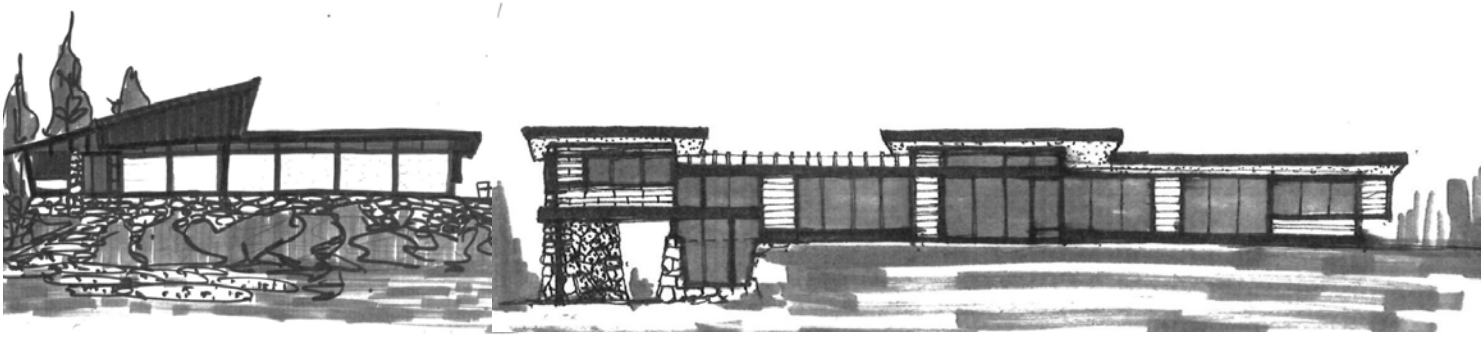
玄関の情景　現地で“はいいし”と呼ばれる阿蘇溶結凝灰岩の石垣積と樽桶端の杉板の壁、分厚い底板の階段段板



①　　②

① 臼杵“酒樽の家”南北断面図と西の立面図、南庭からの情景写真
（岸崎隆生氏との共同設計）

② 玄関の情景　現地で“はいいし”と呼ばれる阿蘇溶結凝灰岩の石垣積と
樽桶端の杉板の壁、分厚い底板の階段段板



浮かんだ雄大な南情景と西側の立面のファーストスケッチ